

ゆあ
浴みする女

あまりに原色な光に満ちた午時^{ひるどき}

俺は、きらめくオレンジの電車の青いシートで

閉じていた臉をそっと開^{ひら}ける

碧みがかった世界が、明るさを取り戻す中

窓外の、遠くの、灰色の箱の上に

きらめかず、鈍く白い柔らかな肢体

その女^{ひと}のマシュマロのような裸体は

一瞬、ガラスに包まれてきらめき

光に包まれて眩しく見えなくなり

そして再び、柔らかな肌を見せ

また、ガラスに包まれて掻き消え

また、光を吸い取り、しろくなり・・・

うらめしいガラスの流れ、きらめく光り

哀しい白さ、雲のような肢体

やくざな男に服したか、愛したか

その肌の白さ、哀しさ、それは

湧き出ずる涙か、ひしがれた心か、それとも

哀しみの春知らぬ童心の嬉しさか、無地の画布か

電車は過ぎる、息せき切って足早に

幻^{うつつ}だったか、現^{うつつ}だったか

窓外を過ぎる眺めの速さに、俺は

とうとうついてゆけず、再び

まぶたを下ろすことを強いられてやむなく

がたごと揺られるがまま、うなだれてしまう

(1982.4.16)